

やり直しのできる社会を！

2025.11.23

新宿連絡会NEWS

VOL. 94

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
NPO新宿氣付
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895
<http://www.tokyohomeless.com>

越年越冬

笠井 和明

今年の夏もとびきり暑かった。

仲間の死という「喪失感」にさいなまれながら、それでも灼熱の路上を歩き続けていたら、一気に季節が変わった。

「あんたら毎週、飽きずによくやるね～」との仲間の声に、「いやいや」と笑って返すと、真顔で「いやいやじゃないよ」「大変だよね」との労いの声。何だか立場が逆転しているようでもあるが、こんな関係もある。再び笑って「これも修業ですので」と、すり抜ける。何の修業だか分からぬが、半分冗談、半分本気。

私たちの日常の活動はきわめて単調である。とりわけ大きなことがあるわけではなく、あるのは瑣末なことばかり。それでもそんなものを積み上げてきたので、当事者との信頼関係はできている。そんなものは橋にも棒にもからないかも知れないが、長年やっているからか、そう云う関係性だけは、自信がある。なので、いつまで経っても「仲間たち」である。

木枯らしが吹き、「酉の市」が始まれば、冬の訪れである。今年は紅葉の方が後回しになっているが、一気の冬はすぐに都会の姿を変えていくだろう。年月が巡るのは早い。

冬は私たちの活動の中でも重要な季節。年末年始の特別な催しもあるが、そこだけではなく、冬全体を捉え、日常活動に緊張感を持たせ、越冬を考えている。

東京の冬もそこそこ寒い。どういう立場に立とうとも、冷たいコンクリート上で横たわっている人々を見れば、痛ましく思い、何かをしたくなるのは人の「情」で

もある。

アンデルセンの「マッチ売りの少女」は、当時の歐州の国々では、ごくごく日常の「野たれ死」の姿であったようである。どのような時代であっても、それは心を痛める。家族とのつながりの希望を夢見て、その夢の中で静かに息を引き取ったと、嘘でもいいから、そう思ってみたい。「凍死」ともなると、その感覚を南国以外の人は誰もが知っているが故に、なおさらである。

新宿も冬場には「野垂れ死」が多かった。

もちろん今もその危険と隣り合わせで、160名近い仲間が毎日路上で横になる。

冬とのたたかいはこれからである。

.....

今年もそう大きな変化はない越年越冬になりそうであるが、数は変わらぬものの、全体的には「目立たなく」なったのは事実かもしれない。なので、東京都の調査の数は減っていく。



今年の夏の「路上生活者概数調査」の結果を都が発表したが、都内で557名、1月調査と比較して8名減ったとされている。減ったとしても、そこは毎年の微減の範囲。まあ、増えるよりは喜ばしいことでもある。

全体的には微減ではあるが、区別の調査では、新宿区が11名も減り、渋谷区が16名も増え、ついに新宿区は、長年保持していた「23区内トップ」の不名誉（？）な地位を、渋谷区に譲り渡した形となっている。しかし、これは夏前、都庁下の「ふれあい通り」の工事の関係で、そこに起居していた人々が分散し、渋谷区寄りに居住地を移しただけのことであるが、それもそんな事情を知る人のみが知ること。

変貌を続ける大都会の中なので、居場所というのは限られてしまう。隣の区へ越境するなんてことはいつものこと。より良い場所を探して転々とし、そこをしばらく拠点にしながら、また移動していく。そんなものもある。

都の概数調査はご存じの通り「昼間の数」。目立ったところをピックアップした調査。夜の移動層はほぼ把握されていない。高市さんのように午前3時から仕事をするような熱心な人は都庁にはいないので、終電が終わった夜の新宿の街や早朝の新宿の街は、そう馴染みがない。目立たない時に眠りにつき、朝になれば去っていく。そうせざるを得ないという人々も、この街には多くいることには、残念ながら気がつかない。そして、そんな前提をつけて「概数調査」を見る人も、めったにいない。「概数」と書いてあるのに「実数」と勘違いをしてしまう。「何だ新宿はたった65名か、減ったね」と思われてしまう。下手に勉強をしてくる議員さんともなれば、「減ったから実態にあった予算に減らしましょう」と来る。そうなると、公式の数字はこれしかないので、現場の役人さんが大慌て、となる。

そんな中、今年は5年に一度の「国勢調査」の年。数字のギャップがとりわけ目立つのだから止せばよいのに、懲りもせず新宿区の統計課は「住所不定者」の分を私た

ちに依頼してくれる。連絡会はマニアックなスタッフが多いので、こういう依頼があるとすぐに乗ってしまう。新宿区内をあちこち回り、正直かつ正確な数値を出す。結果、新宿区内で143名（男性133名、女性10名）の調査結果となった。ほぼ、私たちが日ごろ回っている数字と同じである。もちろん路上の全ての人が調査に協力してくれたわけではないが、その断った仲間の数も含めると、実数はもう少し多くなる。公式とされている東京都概数調査の数とは、かなりの乖離がある。

「本当のことなど誰にも分からぬ」。

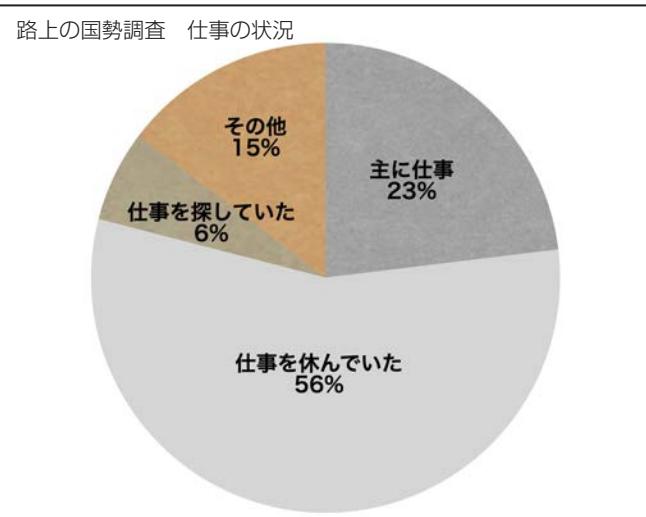
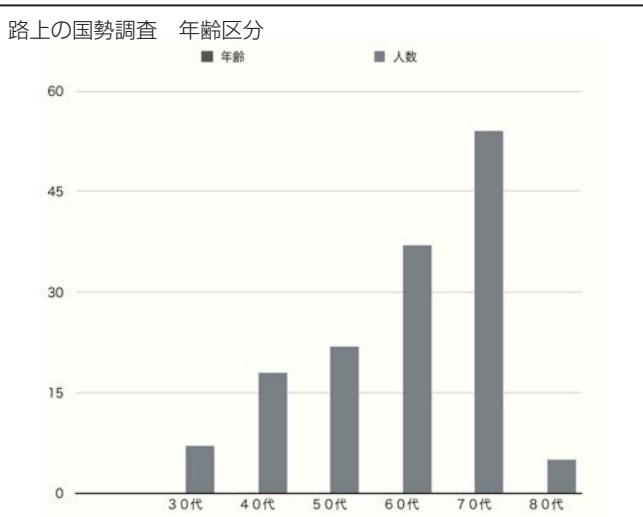
この問題も「知ったかぶり」が多くなったが、こんな数字を根拠にしていると恥をかくのがオチである。

さて、その国勢調査、新宿区内の「住所不定調査」では、平均年齢は63歳、最年少32歳、最年長87歳、70代が最も多く、60代、70代と合わせると全体の64%にもなる。これは国の令和3年「ホームレス生活実態調査」の傾向とほぼ同じ。

若い年齢層が集まる新宿のホームレス者も、「長期・高齢化」の波は進んでいる。女性もまた目立つようになった。

ここでは、新宿区の「推進計画」でいう「見えにくいホームレス」は反映されていない。総務省もそこを気にしてか、「住居不定者等調査」に「夜間又は24時間営業店舗に寝泊まりする住居不定者」の内数を求めてきているのであるが、各自治体、国勢調査では、そこは難しいだろうとスルーとなって、特別な調査はしていないようなので、数は分からない。この、稼働年齢層を中心とした人々の実態は、あまり把握されていない。まあ、無理に把握することもないが…。

その「見えにくいホームレス」の仲間は、情報を知った時、「シェルター」や「自立支援センター」を活用す



る。生活保護の申請に來ることもあるので、そこで福祉事務所に「発見」され、申告し、対応をするのであるが、就労支援を中心としたホームレス対策には、かなり順応してくる。結果として「就労自立」するかしないかは、また別物ではあるが、それはそれで、チャレンジ続けるのであれば良いことである。

なので問題は、この「見えにくいホームレス」とどうやって接し、情報を伝達できるかなのか？であるが、そもそもどこに暮らしていて、何をしているのかすら、バラバラな人々なので、一層その把握は難しくなる。

路上をとにかく見続け、その先をも見通せるよう努力をし続けるしかない。

そして、路上の夏から秋の、私たちが見てきた数字は、そのまま冬に持ち越してある。

寒くなると、雨露しのげる場所に集まるのは当然。冬場の雨は命取り。ガード下であるとか、比較的暖かな地下街で寝るようになる。それが目立たないのは、新宿は他の区と違い移動型の仲間が多いからである。寝床の場所はあるが、そこは昼間はもぬけの殻。夜になると段ボールや寝具を取り出し、寝場所を作る。定住したとしても、一日その中で引きこもっているわけではなく、「エサ」や「チャンス」を求め、あちこちと移動する。アルミ缶やらの都市雑業、また東京都の「特出し」（段ボール手帳仕事）や、今は建築に限らずサービス関係の日雇いの仕事をしているものも多い。ずっといるように思える人も時間ごとにいなくなったりする。居場所が生活基盤となる人はそんなに多くはなく、居場所は単なる寝場所でしかないが、冬場はとにかく寝られる場所と装備をしっかりと確保できるか否かが問題で、冬が初めての仲間はたいていそこでつまずいたり、失敗したりする。なので、情報はとても大事。チラシに単に行政施策だけを載せるのではなく、どうやったら自力で、また仲間同士の力で冬を越せるのかを伝えていくのかは冬の大きな仕事。ネットの時代にチラシなど時代遅れという向きもあるが、最後の最後にはやはり「紙の爆弾」。発行するだけでなく、どれだけ隅々に渡し歩けるかでもあるが、それもまだまだ有効な手段。

信頼関係を作り、情報ネットワークを構築すれば、それはそれで、「いざ」という時には安心でもある。

食事の問題は、新宿界隈で多くの民間団体や宗教団体、また個人で動いてくださる方々も多くいて、こちらも安心である。それぞれ、いろいろな事情があり、継続するのは大変ではあるが、そこはとっかえひっかえ。人の善意はこの非情な都会の中でもそこそこ残っている。

新宿福祉の方でも相談所「とまりぎ」では非常食も出してくれているので、それも最後の最後の手段。寒くて死ぬことはあっても、空腹で死ぬということはなくなつた。それはそれで良いことである。もちろん私たちも「おにぎり」を毎週配り歩き、年末年始は連日の暖かい飯の炊き出しの提供を、それが新宿の越年風景として、あたかもそれが当たり前のように、肅々と行う。

能書きと空回りの決意だけでは冬とたたかえない。まさに官民合わせた総力戦で挑まなければならぬ。その「自覚」と「決意」は東京都にはなくとも、新宿区には、先の「推進計画」のように、あるように思える。それだけはとても心強い。

新宿の西口再開発は順調に進められている。名物の西口地下ロータリーが半分になり、地上に向かう道路も壊され、バス乗り場も転々と、車よりも「人中心」の広場にすると言っているが、どうなることやら。絵図は出ているものの、いまだ感覚として全容が分からない。

この再開発でかなり仲間の寝場所は縮小されてしまっているが、そこはいろいろと工夫して、不文律があるのかないのか。なんとなくの力関係が続いている。日々変わる通行の動線もようやく落ち着いたようで、しばらくはこのままのようである。

都庁の下、「ふれあい通り」の歩道の張り替え工事も順調に進み、移動を余儀なくされた仲間は「まだか、まだか」と、戻る気まんまん。中には見切りをつけてしまった人もいるので、元の状態にはならないような気もあるが、こちらも、どうなることやら。段ボールハウスの小屋の作り方などの継承が今はまるでなく、材料があまり捨てられていないので、その点もあって、ちょいと見た目が不自然になりがちである。見てくれが悪いと、さすが都庁の下だけあって、都知事がトランプさんのよう（見てくれだけの理由で排除しようとする）になってしまふ保証はない。そのトランプさんの来日やら、秋のイベント類も終わり、あとは毎年恒例の東京マラソンがあるので、その頃まで今のままか。

新宿の中央公園は園内がかなり整備されてきたが、テントは一軒もなく、天気の良い日は昼間横になる程度。

戸山公園もアスファルトで埋め尽くす「除染作業」がかなり進んで、立ち入り禁止地区も小さくなつたが、ついでの工事もあちこちで。とうてい昼間、いられる場所もなく、深夜に10名程度の人々が目立たぬよう横になる。

駅の南口の方も、新大久保近辺は、だいぶうるさくなつた。苦情などが多いとのことであるが、役所に苦情を言って自分では何もしないのは、ちと違うのではないかとも思うのであるが、目立つ場所、長くいる場所は往々

にしてそうなる。

そういうえば、とある駅前の「お方」は、なんだかんだ、地域や警察や鉄道会社を巻き込んで騒がれ、最終手段で「入院」となり、しばらくは忘れられていたのであるが、この夏、また戻ってきた。

だいぶすっきりとした姿で戻ってきたので、リフレッシュにはなったのかもしれない。また、騒ぎが始まらないことを祈るだけである。

そっとしておいて、見守るだけも支援の仕方。安否確認だけは大事。

.....

この夏、新宿が含まれる第一ブロックの「自立支援センター」が神田にあった「千代田寮」から、月島の「中央寮」に変わった。

こちらも最近の時流に乗り、ネットカフェのように個室化となり、女性も歓迎（センター直接ではなく、センターが契約する借上げ住宅の方に入るようだが）となったので、若い「目に見えない」人々には大人気。すぐに満床になったようである。飯場経験などがない若い仲間、特に対人関係に難がある仲間は個室を好む。体育会系の合宿だと思えばどうでもないのであるが、そこは大人の世界。同学年の者だけでなく先輩も後輩もいたりして、気をつかうのは当然。それができないと、トラブルになったりもする。個室化のおかげで定員が減ることになったのであるが、そこは仕方のないところか。

そんなこんなの「中央寮」、場所が月島と聞いて、「歴史マニア」「底辺下層マニア」の私などは「石川島人足寄場」の名がすぐに浮かぶ。

開設前ではあったが、興味本位で施設の見学をした後、歩いて人足寄せ場の跡地に赴いた。

たまたま、今年のNHKの大河ドラマの時代設定で、鬼平こと「長谷川平蔵」が頻繁に出てくるのだが、ある回の番組最後に流れる「紀行」で、ちょうど今の「石川島人足寄せ場」の「灯台」などが紹介された。けれど、説明がまったく良くない。江戸時代の「石川島人足寄せ場」と明治政府以降の「石川島刑務所」の違いが分かつておらず、説明もなく、単なる監獄として紹介されていた。この研究の第一人者であった瀧川政次郎先生が、きっと草葉の陰でお怒りになっていることだろう。

「長谷川平蔵」が尽力した「石川島人足寄せ場」の思想は、今の「自立支援センター」の思想につながっている。と、勝手に思っていたが、 Wikipediaで調べてみたら、「加役方人足寄場（かやくかたにんそくよせば）」とは、江戸幕府の設置した軽罪人・虞犯者の自立支援施設

である。一般には人足寄場（にんそくよせば）の略称で知られている。」と記されている。

江戸時代、無宿人の問題は幕府を悩ませた。軽犯罪も増え、治安は乱れ、保安処分的性格の強い「無宿養育所」ができたが、教化するどころか、逃亡者が続出し、閉鎖の憂き目となった。

その反省のもと、時の大老松平定信が、火付け盗賊人改長谷川平蔵宣以（のぶため）に命じ作らせたのが石川島人足寄せ場で、こちらはその効果をしっかりと果たし、幕府崩壊まで、変遷はあったとしても、その「機能」は維持し続けた。

農村の凶作や災害など、様々な理由で江戸に流れてきた者や、やさぐれ生活の果てに野宿になった者でも、それは罪人としてではなく、それらの人々の能力を生かし、自主性を尊び、教育もし、社会復帰の道を就労を軸として見いだそうとした刑罰主義ではない「人足寄せ場」の日本独特の発想は、瀧川先生の研究でも明確になっており、これをそのまま現在に持ってきたら（保安処分的性格の部分を除いてみれば）今の「自立支援センター」ととても似ている。

「自立支援センター」の絵を描いた一人である都庁職（退官し、その後不慮の事故で亡くなってしまったが）の方に、かつていろいろと話をしたこともあるが、もちろん彼らは「石川島人足寄せ場」を意識はしておらず、戦前の「労働下宿」であるとか、戦後の「更生施設」の延長で設計をしたようである。けれど、それも含め、明治以降の社会福祉の歴史の中でも、また戦後の制度の中でも、江戸時代の「人情」を軸にした、瀧川先生いうところの「日本のヒューマニズム」に基づく思想は脈々と受け継がれているように思える。

これらは、儒教の教えもある「孟子の性善説」に基づいていると考えられているが、そう云えば、今の生活保護制度も、同じく「性善説」に立っている。これも同じ流れなのであろう。

まあ、「中央寮」がへばりつく運河の向こうには「晴海フラッグ」がそびえ立って、なかなかその絵図は「貧富の格差」を象徴しているかのようであり、これもまたとても面白い光景であるが、普通の人は何の施設か分からぬから、そう気にもとめない。

施設というのは嫌われ者であるようであるが、今ある施設のそういう面を知るのは楽しいことである。施設の職員というのは日々、そのために働いている。ボランティアが時たま現場に顔を出すのとは違い、日々、真剣勝負そのものである。そして、様々なケースに出会うことで悩み、成長していく。こういうプロがいることを社会はどうしても忘がちである。「長谷川平蔵」も実際は

「小役人」であったようだが、池波正太郎のお陰もあり、今や「ヒーロー」の扱いとなった。山本周五郎の小説「さぶ」の舞台は、まさに「石川島人足寄せ場」である。当時のある意味、破天荒な施設のあり方が、生き生きと描写されている。

そんなことを思いながら、土産に江戸から続く老舗「丸久」の佃煮を買って、甲州街道を歩かず、地下鉄に乗って「内藤新宿」の地に戻った。

.....

「長期・高齢化」した新宿の路上の仲間には、生活保護を勧めるのが一般的である。

が、その生活保護制度で路上生活を脱却できたとしても、そこからが試練となり、我慢がきかなくなると、そこから出てしまい、再び放浪、なんてこともある。

生活保護の側がまだまだ不十分な点も見落とされがちである。住宅問題などもそこには絡み、都心部では低所得の単身高齢者が暮らせる場所が、「開発だ」「土地活用」だと、少なくなり、その家賃も高騰し、生活保護の基準額で暮らせるアパートもなくなりつつある。公営住宅もなかなか増えないとなると、ここはもう泥沼である。

安易に幻想を与える前に、生活保護の側の環境整備をしっかり整えるのも必要である。

施設なのか、アパートなのか、どこに住むのか、ではなく、「そこで何をするのか？」「どう生きるのか？」ということが問われる所以であるが、そこまで行き着くには、それはそれ相応の苦悩や葛藤や修業が必要となる。なので、たいていの人は考えるのを止め、惰性に流される。その方が人間臭くて良いのであるが、役所の世話になると、そうともいかず、真面目に生きることを強要される。それが嫌なら「自分でどうにかなさい」と言われ、「そんなこたあ分かっとるわい！」と啖呵を切って、つまるところは路上暮らし、場末の街で金を拾い、後楽園で三連単の馬券を100円単位で買って夢を見る。

それはそれで、イソップ寓話の「アリとキリギリス」のようだが、この物語、後世、結末が「野垂れ死に」ではあまりにも可哀想だ、教育的にも良くないと、パンを無償で与える話になったよう、計画性がないのは罪ではない。寒くて震えていたら、暖かいスープと防寒着やら毛布を、誰であろうと、黙って渡すのは世界共通。

今の路上の仲間は、病気になったり、持病が悪化したり、怪我をしたりと、救急車などで病院に行く、そして

そこへ福祉事務所が赴き生活保護の申請を勧め、退院した後の厚生施設などを探す。そのようなケースが多くなった。また、巡回相談や私たちのパトロール隊に頻りに声をかけられ、「もう歳だから、野宿は厳しいわな」と諦めて福祉事務所で申請の手続きをする。

生活保護を受給したからとそれで終わりではない。無年金・低年金の問題、住民票の問題、債務の問題、家族の問題、そこを根気強く、その人がより良い暮らしに戻れるようしていかねばならぬから、ワーカーや施設の職員、相談員さんは、それはそれで大変である。

他方、「今は路上で良い」という意思は尊重しなければならないし、期せずして作られてしまった「炊き出し文化」（今やそこを転々としていけば食うには困らない）ともいうようなものも仕方がないのであろう。

防寒着や毛布の放出、まさに「バラマキ」は、「野垂れ死」だけはならないようとするものである。それでは根本的な解決にならないのは無論である。その弊害は私たちが一番よく分かっている。が、死んでしまったらお終いである。なので、分かっているが、それをやり続ける。「応急援護」とはなかなか難しきものもある。

人生に落胆した人々は新宿の街に来れば何とかなると思ってそこへ行く。来てもどうにかなるものではないのであるが、どうにかなる場合もある。「捨てる神あれば、拾う神あり」。ま、そこが新宿の底力。

「黙って野たれ死ぬな！」は、山谷、釜ヶ崎の闘士であり、沖縄で単身決起し29年の短き人生を終えた船本修治氏の遺稿集のタイトルでもあり、オイルショック以降、毎年取り組まれている全国の「寄せ場」の越年越冬闘争のスローガンでもある。

世代が違うので船本氏を直接知らないが、山谷で働き山谷争議団活動をしていた頃、その激しさは、昔の活動家からよく聞いていた。

「確信を持って前進せよ！」と、労働者解放への道筋を言葉と実践で示し、他者の同情を快く思わず、自らの力で時代を切り開こうとした、その重い言葉は、今でも圧巻である。

かなり亜流ではあるが、その系譜の上に立つ私たちは、何となくでも良いから、その思いだけは引き継いで行きたいと思う。

なので、新宿の越年越冬は、「黙って野たれ死ぬな！」と仲間に呼びかけ、その具体的な行動を創意工夫をもって実践して行きたい。

(了)

新宿夏まつり 2025

今年も「熱中症」注意報が連日出された東京の夏。

そんな「危険な夏」と言われる中、例年行事である8月11日の「新宿夏まつり」。相当の緊張感を持って臨んだものの、天気は小雨模様のどんよりとした一日。気温も普段の夏の陽気で、開催時になると雨も止み、それもあってか、各地から160名近い仲間が参加してくれました。

手作りの祭壇で、浅草で活動をしている「ひとさじの会」の吉水和尚から、まずは今年一年に亡くなった仲間、新宿の地で亡くなった仲間への追悼のお言葉とお念佛をいただきました。

一人一人、線香を手向け、それぞれ祈りを捧げました。

あとは、いつもと同じく、皆で作った特製「冷し中華」の炊き出しを食べ、お酒を飲み、再会を喜んだりして、三々五々に思い思いの時間を過ご

す「お祭り」。

厳しい中でも仲間の笑顔も多く見られ、よい一日を過ごさせていただきました。その群衆の中には、きっと亡くなった仲間もひょっこりと加わっていただろう。



い ろりん村プロジェクト ~ 2025 稲刈り 収穫交流会 ~

10月10日、まだ残暑が厳しい中、今年も越後「いおりん村」に、新宿から総勢11名が出向し、稲刈り作業をしてきました。とはいっても、こちらの都合どおりにはいかない。天候などの理由で「いおりん村」周辺の稲刈りは既に終了しているところもあり、そんな中、わざわざ私たちが刈る稻を残してくれた地元の農家さんには感謝、感激。コンバインなど機械は使わず、もちろんすべて手作業、ひいひい言いながら、総員、腰をかがめて刈り切り、束にして「はさ掛け」まで、村長さんの指導のもと、一緒に行いました。他の農家さんの作業も手伝いと、今年はそんな体験をしてきました。

そして夜は松之山温泉にて地元の農家さんを招いての交流会で親睦を深めました。

今年は「援農」スタイルに徹し、米不足だ、記録的猛暑だ、その上、増産しろとかしないとかで、社会の矢面に立たされている農家さん達の邪魔をできるだけしないよう心がけてきました。

やはり、素人がつべこべ動いて、夢を語っても仕様がない。地方との良い関係性の中でしか

物事は進まない。恩返しがあだになったら本末転倒。

もちろん「いおりん村」プロジェクトは、いろいろ形を変え、品を変え、これからも続けていきたいと思います。

稲刈りの翌日は、連絡会の慰安旅行、日本海を見て、美味しいものを食べ、「わいわいがやがや」で良い息抜きになりました。長距離にも関わらず快く引き受けてくれたドライバーの仲間にも、感謝。





巡回 おにパト 2025 7-10期

暑くても寒くとも、毎週欠かさず「おにぎりパトロール」と称した、巡回形式での相談や物資・食料提供を行っています。もはや、これが私たちの日常。

数の方は深夜パトロール（新宿駅周辺）の平均値が144名。国勢調査の調査数（新宿区内全域）が143名と、似通っている。これくらいの仲間の数は間違いなくいる。新宿地域、160名というのが実際に路上生活を余儀なくされる人々の概数（連絡会調査）であるが、その他、「見えにくいホームレス」を足せば、200を優に越すのであろう。そして、その数は、この数年は横ばいで、大きな変化はない。もちろん出たり入ったりの数なのであるが、路上をシェルターとして考えると、今の新宿はこんなキャパシティなのかも知れない。

おにぎり巡回パトロール 7-10月実績

	都庁	西	公園周辺	東	小計		周辺部	戸山地区	合計	
					(前年同月比)				(前年同月比)	
2025	7月6日	42	18	11	45	116				
	7月13日	42	14	10	46	112				
	7月20日	47	18	14	49	128				
	7月27日	34	13	10	44	101				
	7月平均	41	16	11	46	114 (-1)	10	12	136	(+5)
	8月3日	39	14	12	58	123				
	8月10日	26	24	14	44	108				
	8月17日	32	17	16	51	116				
	8月24日	43	20	7	41	111				
	8月31日	35	17	5	31	88				
	8月平均	35	18	11	45	109 (-4)	11	14	134	(+5)
	9月7日	47	18	11	45	121				
	9月14日	37	16	10	47	110				
	9月21日	33	30	11	50	124				
	9月28日	37	16	8	49	110				
	9月平均	39	20	10	48	116 (-10)	10	11	137	(-8)
	10月5日	51	17	8	48	124				
	10月12日	58	18	8	37	121				
	10月19日	49	17	9	50	125				
	10月26日	54	18	10	39	121				
	10月平均	53	18	9	44	123 (+1)	11	11	145	(+4)
									4ヶ月平均	138 (+1)

深夜巡回（パトロール/軽食配布、毛布配布 7月より10月）活動で出会った仲間の数

2025										
日時	天候	4号街路	都庁下周辺	西口地下	西口地上	東(御苑含)	大ガード周辺	新南口周辺	深夜計	
7/13-14深夜	曇	35	20	44	24	2	10	16	151	
7/27-28深夜	晴	31	21	40	20	2	5	14	133	
8/10-11深夜	雨	35	16	47	24	2	6	19	149	
8/24-25深夜	晴	33	11	37	24	2	7	26	140	
9/14-15深夜	晴	35	17	42	22	2	6	18	142	
9/28-29深夜	晴	34	15	46	21	2	3	16	137	
10/12-13深夜	曇	32	14	49	18	2	6	24	145	
10/26-27深夜	小雨	29	23	48	20	2	5	25	152	
									平均	144名 前年比-17名

黙って野たれ死ぬな！

新宿越年越冬

2025年12月28日（日）～2026年1月5日（月）

★前段

- 12月21日（日） おにぎり＆毛布配布パトロール 午後4時半 （都庁下集合）
12月22日（月） 年末最後の福祉行動 午前9時より（新宿福祉事務所）
12月25日（木） 年末よろず相談会 午前10時より15時まで（高田馬場事務所）

★12/28から1/4までは新宿中央公園「水の広場」午後2時～18時に常駐 ※雨天は都庁下にて

- 12月28日（日） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し パトロール（夜間新宿駅周辺）
12月29日（月） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し
12月30日（火） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し パトロール（戸山公園周辺）
12月31日（水） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し 色々催し。
年越しそば、お神酒、メロンパン （都庁下から駅西口広場へ）
1月1日（木） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し
1月2日（金） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し パトロール（夜間新宿駅周辺）
1月3日（土） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し
1月4日（日） 相談会、衣類、毛布配布、越年炊出し パトロール（夜間新宿駅周辺）
1月5日（月） 福祉行動 午前9時より（新宿福祉事務所）

新宿連絡会 会計報告

今期も多くの方から、衣類物資や資金の寄付を頂きました。ありがとうございます。物価高騰など生活が厳しくなる中でも「少しですけれども使ってください」と、わざわざ持ち込みをしてくださる方もいます。頭が下がる思いです。

また、信州「山谷農場」からは、お米のほか「じゃがいも」や「かぼちゃ」などが送られてきます。こちらで使い切れないものは小袋を用意し、仲間に直接どうぞと渡しています。これがとても好評で、やはり物価高の中、自分で調理する仲間も増えているようです。

なお、今期会計で「その他事業費」が膨らんでいるのは、先日亡くなった仲間のアパートの遺品整理をし、その後の改修工事を仕事作りの一環で行った経費が加わったためです。少し分かりにくいので決算時には、内訳の細目をつける予定でいます。

引き続きのご支援、よろしくお願ひいたします。

2025年度 7月～10月新宿連絡会収支報

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部			
1 寄付金収入	753,509	2 管理費	
計上収入合計	753,509	旅費交通費	12,270
II 計上支出の部		通信費	53,260
1 事業費		消耗品費	49,099
おにぎり/炊出し事業	348,558	事務用品費	26,939
巡回活動費	262,808	事務所費分担金	120,000
農業支援事業費	128,239	衛生管理費	40,602
夏まつり事業費	222,970	支払手数料	8,295
その他活動事業費	695,346	車両費	121,429
		修繕費	3,459
		計上支出合計	2,093,274
		計上収支差額	△1,339,765
		前期収支差額	3,802,116
		次期繰越金	2,462,351

●活動カンパ 振込は 郵便振替口座00160-6-190947 「新宿連絡会」まで。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10-106号NPO新宿氣付「新宿連絡会」宛てでお願いします。